編集余録

日本文化学部言語文化学科研究紀要第1号発刊を終えて

日本文化学部言語文化学科研究紀要第1号が発刊されました。先生方におかれましては、本学青梅校舎開学時のご多忙中にもかかわらず、論文執筆等にご協力いただき、お蔭様で開学年度から発刊できましたことは誠に意義があるものと考えます。これには学長の児玉三夫先生をはじめ、学部長の井上英明先生、生活芸術学科主任教授の井関正昭先生、編集幹事の古田島洋介・井出洋一郎・山下善明の3先生のご助言・ご協力を賜わったことが大きな力となりました。最初の企画では、学部単位の2種類の研究紀要を発行し、学科単位の研究紀要の発行、その時期等については今後各学科でご検討いただくことにしておりました。日本文化学部でも当分の間は学部単位の研究紀要を発行し、機が熟したら学科単位のものにするとの予定でありました。諸先生方が多数の論文等をお寄せ下さったことと、学問の性格上、創刊号から学科単位のものを発行するほうが、今後の編集作業がスムーズに展開するとの趣旨により、当初から別個のものになりました。したがって、情報学部研究紀要・日本文化学部言語文化学科研究紀要・日本文化学部生活芸術学科研究紀要の3種類の研究紀要が当面年1回の頻度で発刊されることになったわけであります。

また、一般教育をご担当の先生方の場合には、〝いわゆる自然系〟の論文をご執筆の際には、情報学部研究紀要に、また〝いわゆる非自然系〟の論文をご執筆の際は、日本文化学部の両研究紀要のいずれかに掲載していただくこととし、やや分類が困難な〝境界領域〟に属するような論文等の場合には、両学部合同の編集委員会等で検討の上、いずれかの研究紀要に掲載していただくことに致しました。

本学青梅校舎は、これまで別個に研究されてきた情報科学と経営情報を融合させ、真の情報化のために、理工学的思考と経営学的思考の有機的な関連を模索する電子情報学科と経営情報学科から成る情報学部と、日本が真に国際化するために世界の文化との「比較」「対比」により日本固有の文化に対する理解を深め、その価値を客観的、科学的に研究する言語文化学科と生活芸術学科から成る日本文化学部の2学部4学科から構成されており、現在各分野でご活躍中の著名な先生方が多数ご参集下さっておられます。したがって、昨秋から青梅校舎で開始致しました主として学内を対象とした特別講義、学外の高校生を対象とした生活芸術学科夏期講習会、学内外を対象とした公開講座もお蔭様で青梅市を中心とする地域住民の皆様に大変好評を博しました。これらに加えて、今後開催を予定している学内外の先生方に行なっていただく各種講演会等も毎年度恒常的に開催するとと

もに、学内外で先生方がご関連の専門分野で学術研究・教育・普及活動を活発にご展開下さって、その成果やあるいは研究速報的なもの・研究関連資料等の紹介記事等もこの3種類の研究紀要にご執筆下され、またこれら研究紀要に掲載された内容を集大成なさったものを本学の明星大学出版部から単行本の形で刊行される。これが契機となって学界等で前向きで建設的な議論を呼び、学界等のシンポジウムが数多く開催され、その成果がさらに何冊もの専門書となり、その内容が公知の事実になって、学問レベルを益々高める。また成果は広く公開され、地域を含めた公共の利益にも供される。このようにして、学界や斯界の発展に貢献するとともに、学術上の成果を国を含めた各種地方公共団体や国民一人ひとりに還元してゆくのが大学の本来の使命でありましょう。

本学青梅校舎が近い将来、多摩地域の、さらには我が国の学問ならびに芸術の情報発信の中心基地として、現代風に言えば、センター・オブ・エクセレンス (Center of Excellence, COE) として、内外の各分野の専門家はもとより、地域住民一人ひとりにも認識されるようになれば、本学青梅校舎の一層の発展が約束されたものとなりましょう。その実現を念願してやみません。

なお、末筆でありますが、本研究紀要発刊に当たり、編集企画・立案・印刷・校正等の各段階で積極的にご協力いただいた編集幹事の先生方に深く感謝の意を表するとともに、研究紀要3誌の装丁を一手に引き受けて下さった本学青梅校舎の羽原肅郎教授（日本文化学部生活芸術学科）に対し、編集委員会に代わって衷心より謝意を表します。

（須崎祐吉）

われわれの用いる言葉はすでに、古典や歴史に立ち向かえるだけの根源的な力を失い、時代の病で衰弱した言葉だ、と言われるようになって久しい。だがわれわれは、この人里離れた（？）風光の地で、新たなる言語体験、更生せる言語による新たなる真理体験が生まれ出づることを願うものである——と言えばなんだか若い文学徒達の同人誌発刊の辞のように聞こえるだろうか。次号の、今号に劣らぬ盛観を待ち望みつつの一筆でありました。

（山下善明）

とにかく創刊号の現物を手にしてほっとした気持ちである。私見では、大学の研究紀要には、いわゆる学術論文の内容・体裁を厳密に守らずとも、何かの役に立つ可能性のある文章であれば、たとえ簡単なメモ書き程度のものでも掲載してよいと考えている。要するに、真摯な学術的意図さえ有する文字であれば、とにかく活字にして、研究者の共有できる形にしておくことが重要だと思う次第である。幸い、この創刊号には書評をも含め、計11篇の文章を掲載することができた。次号以下においても、日頃の研究活動の中間報告なり成果なりを気軽に文章にしていただけるよう、関係各位に切にお願いしたい。

（古田島洋介）